

平成25年3月7日から（12時より）津波警報が変わります。

気象庁では、平成23年（2011年）東北地方太平洋沖地震による津波被害の甚大さに鑑み、津波警報等の改善に向けた検討を行い、平成25年3月7日（12時）より新しい発表基準や情報文による津波警報等の運用を開始します。

津波による災害の発生が予想される場合には、地震発生後約3分で大津波警報、津波警報または津波注意報を発表します。その後、「予想される津波の高さ」、「津波の到達予想時刻」等の情報を発表します。

● **マグニチュード8を超える巨大地震の場合は、正しい地震の規模をすぐには把握できないため、その海域における最大級の津波を想定して、大津波警報や津波警報を発表します。**これにより、津波の高さを小さく予想することを防ぎます。

● **このとき、最初の津波警報では、予想される津波の高さを「巨大」、「高い」という言葉で発表して非常事態であること**

を伝えます。

● **これまで8段階で発表していた予想される津波の高さについて、被害との関係や、予想される高さが大きいほど誤差が大きくなることなどを踏まえ、5段階に集約します。**

● **予想される津波の高さの各区分の高い方の値を、予想される津波の高さとして発表します。**

「巨大」という言葉を見たり聞いたりしたら、東日本大震災クラスの津波が来ると思っただけに高い場所へ避難しましょう！

これまで

8段階

大津波警報・5段階
津波警報・2段階
津波注意報・1段階

これから

5段階

大津波警報・3段階
津波警報・1段階
津波注意報・1段階

巨大地震の場合

「巨大」「高い」の2段階
津波注意報は表記されません

【津波警報・注意報の分類と、とるべき行動】

分類	予想される津波の高さ			とるべき行動
	高さの区分	数値での発表	巨大地震の場合の表現	
大津波警報	10m～	10m超	巨大	沿岸部や川沿いにいる人は、ただちに高台や避難ビルなど安全な場所へ避難してください。津波は繰り返し襲ってくるので、津波警報が解除されるまで安全な場所から離れないでください。
	5m～10m	10m		
	3m～5m	5m		
津波警報	1m～3m	3m	高い	海の中にいる人は、ただちに海から上がって、海岸から離れてください。津波注意報が解除されるまで海に入ったときや海岸に近付いたりしないでください。
津波注意報	20cm～1m	1m	(表記しない)	

【津波観測に関する情報】

津波警報の発表後、沖合や沿岸の観測点で観測した津波の高さや到達時刻を発表します。**高い津波が来る前は、津波の高さを「観測中」として発表します。**大津波警報や津波警報が発表されている時には、観測された津波の高さを見て、これが最大だと誤解しないように、津波の高さを数値で表さずに「観測中」と発表する場合があります。

詳しくは気象庁ホームページをご覧ください。 [津波警報改善](#) [検索](#)

地域で 予防 感染症 4

杵築市が、元気な子ども育つまちになるために、感染症の蔓延をどのように予防すべきか、シリーズで学びます。

乳幼児に多い「ヒブ髄膜炎」について、今回は市立山香病院の山田博先生にお話を伺います。

ヒブ(Hib)とは何のいっしょでしょうか

ヒブ(Hib)とは、インフルエンザ菌b型という細菌で、英語名の「Haemophilus influenzae type b」の略称です。19世紀末に、いわゆるインフルエンザの原因菌と間違われたため、この名前がついています。インフルエンザウイルスとはまったく別のものです。インフルエンザ菌は、aからfまで6型に分かれます。

ヒブ髄膜炎

が、このうちb型は最も病原性が強く、乳幼児の細菌性髄膜炎の約60%がこのヒブによるものといわれています。

では髄膜炎とはどんな病気ですか

脳やせき髄を包んでいる髄膜に細菌やウイルスの感染が生じたものを「髄膜炎」と呼びます。

髄膜炎を起こしたときは、発熱、頭痛、おう吐、意識障害、けいれんなどが起こります。しかし早期には発熱以外、特別な症状がみられないことも多く、風邪などと見分けにくいため、早期診断は大変難しい病気です。

ヒブ髄膜炎は、5歳未満の乳幼児2000人に1人の割合で発症するといわれていますが、診断された後適切な治療がされたときには、留まっています。

ヒブ髄膜炎が乳幼児に多いのはなぜでしょうか

療がされたとしても、5%が死亡、25%にてんかんや聴覚障害、発達の遅れなど重度の後遺症が残るとされています。

ヒブ髄膜炎の53%は、0歳代の乳児に生じていますので、明らかに乳幼児、特に乳児に多い病気です。もともとこのヒブは、のどや鼻に普通にいる常在菌で、小児では50%、成人では5～10%の人が持つて（保菌して）います。その保菌者の咳や鼻水、くしゃみなどからまた他の人ののどや鼻に感染しますが、通常は全身に広がることはなく、そこに留まっています。

ところが、風邪をひいたときなど、のどや鼻に炎症が生じたときには、留まっています。

治療法や予防法はありますか

ヒブが増殖しはじめ、全身の血液中に波及することがあります。大人は免疫機能が高いのでヒブの増殖を防げますが、免疫機能が不十分な乳幼児では、ヒブが髄膜まで達して、髄膜炎などの重度な感染症を引き起こしてしまいます。

極めて重い病気ですので、診断がつき次第、数種類の抗生剤の点滴を開始します。意識障害やけいれんなどで生じている場合も多く、人工呼吸器をつけながら治療を行うこともあります。しかし最近では、抗生剤に抵抗力があるヒブが増えてきており、従来の抗生剤では治療効果が不十分な場合があります。そのため、何より予防接種を必ず行い、ヒブ髄膜炎にならないことが大事です。

予防接種の効果や副反応はどのようにでしょうか

日本では、2007年1月

からヒブワクチンが接種できるようになりましたが、世界ではそれ以前に100か国以上がヒブワクチンを接種しています。

米国では、1987年にヒブワクチンを導入して以来、ヒブ髄膜炎は以前と比べ10分の1に激減しています。ドイツ、イギリス、オランダでも同様に激減しており、数ある予防接種の中でも、最も効果が認められているもののひとつです。

ヒブワクチン接種による副反応には、発熱や接種部位の腫れなどが報告されていますが、深刻な副反応は他のワクチンに比べても稀です。残念ながら杵築市でのヒブワクチンや同じく髄膜炎の原因菌である肺炎球菌のワクチン接種率は大分県下18市町村の中で最低です。

ぜひ、かかりつけの医師等に相談して、なるべく乳児期早期から、ヒブワクチンの接種を行っていただきたいと思っています。